

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どものイマジネーションの発動性：時間・空間・人間(じんかん)の転換
Author(s)	長浜, 博; 亀山, 貴洋子
Citation	児童の言語生態研究, 16 : 112 - 124
Issue Date	2004-02-10
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045198">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045198</a>
Right	
Relation	



# 子どもものイマジネーションの発動性

## 時間・空間・人間（じんかん）の転換

■教材『母さんの歌』大野允子

長 浜 博  
 亀 山 貴洋子

一、日時

平成十一年七月二十九日（木）  
 午前九時三十分

二、児童

静岡県天城湯ヶ島町立狩野小学校 六年  
 亀山貴洋子学級（男子十八名 女子十三名）

三、授業形態

児童の言語生態研究会会員によるティームティーチング

四、授業テーマ

子どものイマジネーションの発動性  
 時間・空間・人間の転換

五、領域

構え

六、テーマ設定の理由

わたくしどもはイメージを、我々の現実生活を誘導している人間活動の源泉・エネルギーそのものであり、単なる想像された結果とはとらえていない。現実的な壁にぶつかり行動が停滞した場合でも、イメージ運動が活発な人間ほど新たな展開に切り替えていくことができるのである。それは我々人間が、本来経験したことや現実にあつたことだけをもとにして生きているわけではなく、むしろ経験がなくても、イメージの誘導による生活に最も自分らしい生き方を実感しているからではないだろうか。

子どもたちがイメージの世界（夢の世界）と現実の世界にどのように生きているか調査した結果、次のような事がわかってきた。

低学年の段階ではイメージ世界を優先させて生きてきた子どもたちが、中学年になると現実意識が濃厚になるのに伴い、イメージ世界よりも現実意識を優先させる生活に転換せざるを得なくなる。さらに高学年に

なると、自分の生活の中で蓄積されてきた常識によって純粋なイメージの発動に、ブレーキをかけたたり、現実的な範囲でしかイメージを働かせなかつたりする姿もみられるようになってくる。そのためイメージを連続させていく場合でも「そして」「だから」というような一方ではしか伸ばしていけない。別の面からいえばイメージがみられなくなっているということである。

そこで今回の授業では、そうした六年生の段階をふまえ「ある場面に対して反対の立場を想定しイマジネーションのおもむくままに話を作る」という活動を行う。

授業では教材文として「母さんの歌」を使用する。この物語ではくすの木を通して戦争の悲劇を訴えているのだが、その悲劇性を読み取ることを目的としない。

「幸せな親子だ」という場面設定が初めにある。この事実にとらわれるのであればそこにはイマジネー

シヨンの方向がひとつに導かれ、それ以上発展することがない。しかしここに「もしかしたら幸せではないかもしれない」という反対の視点を与えることによって、そのイメージネーションは刺激され躍動することが予想される。そこに潜在意識の発動性をみようと考えている。

「不幸」という意識の方向性に「幸福」、「幸福」という意識の方向性に「不幸」という全く反対の刺激を与えることによって、子どもたちのイメージネーションがどのようにふくらんでいくかを確かめたい。そしてその活動を通して、自分たちの日常生活が経験してきた現実によってのみ成り立っているのではなく、未経験の仮想（潜在意識）によっても成り立っているというこの意識化を図りたい。

自分自身の中で反対の立場を自由自在にとれるようになることによって、自分の創り上げてきた常識の枠から解放され、自分本来のイメージ世界を研ぎ澄ませることができるようではないだろうか。

### 七、本時の目標

ある場面に對して反対の立場を想定し、イメージネーションを流すことができる。

### 八、展開

学習活動	学習への支援 ※観察の視点
一、本時の学習を知る	○設定された場面に對して、反対の立場を想定し、イメージネーションのおもむくままに話

### 二、「夜のくすの木」のプリント①を読む

このあと、場面設定を確認して、反対の立場を想定し、イメージネーションのおもむくままに話を作る。

### 三、発表をする

反対の立場で書けているかを確認し合う。

### 四、プリント②を読む

時、場所、人を①のときと同じように、拾い出す。

### 五、拾い出した言葉を中心に場面設定をし、反対の立場を想定し、イメージネーションのおもむくままに話を作る。

○設定された場面に對して、反対の立場を想定し、話を作ってあるかの確認をする。(その時① ※時間・空間・人間のどれを転換しているかを見る。)

○場面設定↓

●くすの木 (空間)

●夜 (時間)

●風呂帰りの母さんと坊や

●母さんのやさしい声 (人間)

○時間 (夜)  
空間 (くすの木・焼けた  
広島の町・爆弾)  
人間 (かわいそうな親子・やさしい子守歌)  
が、指摘できたかを確認する

### 六、発表する。

反対の立場で書けているかを確認し合う。

### 七、プリント③を読む。

○設定された場面に對して、反対の立場を想定し、話を作ってあるかの確認をする。(その時※時間・空間・人間のどれを転換しているかを見る。)

### 八、感想を言う。

○③が②の反対の立場になっているかどうか、把握できているか、その感想を聞くことによって、判断し、子どもたちの意見を聞く。(ex 死―不幸を結びつけている子どもに、示唆をする。)

### 九、評価

設定された場面に對して反対の立場を想定し、イメージネーションを流すことができたか。

①

〈くすの木まち〉はバスの終点です。道のほとりに大きくなくすの木が立っていました。大人の手で三かかえはあろうという太い幹でした。

終バスが着いてまばらな人影が露地に消えると、くすの木のあたりはひっそりします。

細い月の出た夜でした。くすの木の頭が空の中でゆれていました。

「おや？ 聞こえるぞ。」

くすの木は足元で小さな歌声を聞いたのです。

「母さんが歌ってる。優しい声だな。」

くすの木はうっとりしました。

「……しあわせな 親子だ。」

手をつないだ親子がくすの木のそばを通って行きました。下駄の音がころころと。

風呂帰りの母さんと坊やでした。

母さんの歌声がくすの木の心をゆすぶりました。

くすの木はあの夜の事を思い出したのです。

②

「かわいそうな、とつてもかわいそうな親子だったよ。」

夜空が真っ赤に染まって、広島町の町が焼けていった夜の事です。

「ずうっと遠い 昔の事のようにだ。いやいや、なんだか昨日の事のようにだ。」

くすの木は町が焼けていくのを見ました。

人の死んでいくのも見ました。

「ひどい爆弾だったよ。ほんとにひどい事だった。この道をみんな逃げていった。足元へ倒れて動けない人もいたよ。」

暑い夏の日でした。くすの木のまわりにはひいやりしたかげがあったのです。

日が暮れると、広げた枝の茂った葉がつゆの落ちるのを支えました。

太い幹によっかかって眠る人もありました。土の上になががって眠った人もありました。

くすの木のにおいがかすかにただよっておりました。「みんなやけどをしていた。逃げようにも、もう動けなかったんだ。ものを言う力もないようだったな……。」

町を焼く火がくすの木の頭を赤々と照らしていました。

「大丈夫だよ。こんな町はずれまで、火事は広がってきやしない。安心しておやすみ。」

くすの木は足元で眠っている人達を自分が守ってあげなければならぬ、というような気持ちでした。

「おや、聞こえる。」

くすの木は足元で小さな歌声を聞いたのです。優しい子守歌です。

「母ちゃん。」

「なあに。」

「か、あ、ちゃん。」

「はいよ。」

母さんの胸に顔をうめて、後はなんにも言えないのです。

坊やの母さんは、お下げの髪の女学生でした。涙をためて、見も知らぬ坊やのために子守歌を歌っているのです。

母さんの名を呼び続ける坊やをほっておけなかったのです。

声が段々弱っていきました。迷子の坊やは顔じゅうひどいやけどで、もう目も見えないようでした。

「母ちゃんよ。さ、おいで。」

女学生は坊やをしっかりと抱きました。

女学生の心はお母さんの心になりました。

くすの木に寄りかかって、坊やを抱いて、静かに子守歌を歌い続けたのです。

「……いい歌だ。歌っておやり。ずうっと、ずうっと、声の続く限り歌っておやり。小さな、優しい母さん！」

くすの木は胸がつまりそうでした。でも、うれしかったのです。

「坊や、よかったな。お母さんに抱かれていいな。」

「言いながらくすの木は体を震わせていました。かわいいそうな、小さな親子……。」

子守歌を聞きながら、坊やは死にました。

やがて、朝が来て日の光が小さな親子の頬を照らしました。

「まるで、生きてるようだったよ。二人とも……。」

坊やを抱いたまま、くすの木によりかかったまま、女学生も死んでいました。

「……目をつむると、今でもあの歌が聞こえてくるよ。うだ。」

くすの木の独り言が夜空を流れていきました。

武村

おはようございます。座ってください。では、先ず紹介します。

(参加者は自己紹介をする。子ども達はそれぞれの紹介に聞き入っている。)

授業始まる前にね、こういう言葉知ってますか？(黒板に「二期一会」と書く。)これは「いちごいちえ」と読みます。「二期一会」というのは人生でいっぱいいろいろな人と出会うでしょ。その出会ったときのチャンスというのが、たった一回のチャンスであっても、その人生の中でとつてもすばらしいものだったりすることもあるということなんだね。君たちの長い人生で言えば、今先生方がこういうふうに来ていっしょに勉強する、これはねほんの一つのことかもしれない。君たちの人生で言えば通り過ぎただけかもしれない。でもね、それがすばらしいチャンスになるかもしれない。でもそういう風になるためには、やっぱり君たちの協力が必要なんだよ。

先生はこう思ってる。みんなの頭や心の中にね引き出しがあると思う。そしてそのいろんな引き出しを一つ一つ引き出しながら、それを使って亀山先生と勉強してきたと思う。今までまだ君たちが使っていない自分で気がつかない引き出し

があるのかもしれない。その引き出しをあけてみよう。自分が自分で持つてる引き出しがあるのにそれを使わないと言うのは非常にもったいない。その引き出しを開けるためには鍵が必要なんだ。

今からやる授業はちよつと国語の授業とは、普段やってる授業とはちよつと違うんだ。君たちに考えてもらおう思ってもらうのは、普段やってる授業とはちよつと違います。だから最初のうちは「あれっ?何をやるんだらうか?」「どうしたらいいのかな?」と思うかもしれない。先生の言っていることをよく考えていれば「ああそうか、こういうことを考えればいいんだな。思えばいいんだな。」というふうに着目して考えてくれたら、自分の引き出しを開けることができる。先生達はね、君たちにその鍵を渡すだけ。自分の持つている引き出しの鍵を先生方は一人一人に渡すだけ。それで、自分自分、一人一人が持つている引き出しをその鍵を使ってどうやって開けて、自分の考えや思っていることを出す。それはおそらく君たちが思ってもいなかったようなことかもしれない。自分が使ってたかったりしたような引き出しかもしれない。「あつ、それくらいのことだったらいつも使っているよ。」「それくらいのことだったら、いつも引き出しを開けてうまくやってるよ。」というかもしれない。でも君たちの中にはね、自分でいるんな引き

亀山

出しを持つていても、その引き出しは使ったことがないって人がいるかもしれない。でもそれはそれでいい。もしかしたら、君たちが授業が終わった後でも、その引き出しを使えなかったという人がいるかもしれない。でもね、それでもいいかもしれない。「ああ、あの子にはああいいう引き出しがあるんだ。よし自分にもあるはずだ。そのうちに開けてやろう。」というふうにも思っただけでもいい。そういうことで君たちに今日協力してもらいたいんだ。先生がその引き出しを開ける鍵は渡しません。その鍵を開けてどういう引き出しから中身を取り出すか、それは君たちが考えてください。

頭がぐじゃぐじゃになっちゃたかな。みんなが持つてるんだから、自信もってやって。

葛西

だいたい今日やることは、いつもと違うけど、(今日は先生というのを使うのをやめた)と(注釈)今武村のおじさんがお話をした。そして今度は葛西のおじさんがお話しする。それで疲れてきたら、どっかのおばさんがやるというようになるだろうと思っただけです。いつもは一人の先生が授業をやるんだけど、入れ替わり立ち替わりに。それともう一つ、やっぱり正しい答えを最後は見つけようとしてるわけ、正しい答えを出そうとしてるわけ。でも今日はあんまり正しい答えをとばかり考えないで、今日は引き出しとい

うお話がありましたけれど、「ぼくのわたしの引き出しはこうですよ。」「今はこの引き出しがいいと思います。」そんなふう  
に考えてくれればいいと思います。答えを出そうと考えない方がみんなほとんど  
君たちの考えをここにしているおじさん達やおばさん達に聞かせてほしいです。あ  
まり正しい答えを出そうとばかり考えなくともいいと思います。

それじゃあ、回してください。「夜のくすの木」①を配布し名前を書いてください。そうやってね、今配ったものを見てもら  
うとわかるけど、まだまだこのお話の途中なんですけど、いつもは教科書を使っ  
てるんでお話の最後まで読むことができるんですけど。今日はそれを使ってみんな  
にこんな事を考えてほしいんです。一言で言いますと、「事実と反対のことを仮定し  
想像する」ものすごく難しいような感じがする？（課題を板書）ちよつと読んでみま  
しょう。誰かに朗読してほしいんだ。じゃあ最後まで黙読してみてください。

みなさんがよく知っているくすの木がで  
てくるお話のようですね。  
門を入ったところに大きなくすの木が  
二本ありますね。じゃあ、もう一度朗読し  
てもらいます。

〔夜のくすの木〕①を朗読する。

で、そのお話をみんなで一人一人  
に考えて、続けてほしいわけです。その時  
に「事実と反対のことを仮定し想像す

る」。ただ思いつくままに考えるのではな  
くて、ここにあるような条件を押さえて  
考えてほしい。

今読んだところで何を事実として言った  
らしいでしょう。いくつかある。

文の中から見つけてごらん。

これは一つ事実として取り出すことが  
できる。

考えたり想像した事じゃないことを、  
今読んだ中から探してごらん。そんなに  
難しく考えなくてもいいよ。

一つの場面がそこに書かれてるわけね。  
どんなことよって場面ができているか  
ということよ、その一つ一つを取り出し  
てくれればいい。

みんなの頭の中に絵が浮かんでしまし  
たか。その絵の中にどんなものがあるか  
なあ。文の中にあるんだけど発表して。

じゃあ、いつかな。  
裕一朗君。いつじゃなくてもいいよ。自  
分の見つけたもの。

くすの木と、その下を通つてる親子。  
くすの木の下の場所だね。それから、親子。  
どんな親子ですか。

お風呂帰りの母さん。

細い月の出た夜

月の出た夜。真つ暗闇ではもちろんない。  
夜の話。

もうだいたいこんなところでしょう  
ね。細い月の出た夜。くすの木の下のあ  
た、場所はね。そして親子、風呂帰りのお

母さんと子ども、どれくらいの子どもだ  
ろう。君たちくらい？  
坊やだから幼稚園くらい。  
きつとちっちゃい子だね。

親子についてもつと言つてないかなあ。  
中川はいどんな親子かな？ 裕一朗君。  
歌を歌いながら、下駄を履いて歩いてる。

子どもに歌を歌つてあげながら、今お  
風呂から帰つてくる。そんなことが今読  
んだ所から事実として取り出すことができ  
るんですね。「それと反対のことを仮定し」

仮定つてわかる？  
〔子どものつぶやき「仮にって事？」〕  
仮にこうだと思つて、いつもみんなが  
やつてるように想像して話を考えてみて  
ください。話を作ることをやつてほしい。

思いつくままじゃないよと言つたのはこ  
このところ。今黒板に書き出したことを  
ふまえて、その反対のことを仮に考えて。

たださあ、「くすの木はあの夜のことを  
思い出したのです。」という続きを勝手に  
考えていいよつてことじゃなくて、ここ  
に出してくれたね。これとは反対のこと  
で話を続けていきたいんだけどつてこと  
なんだね。わかりますか。

では、用紙を配ります。上に書き出して  
ありますね。「くすの木、夜、幸せな親子、  
母さんの優しい歌声」。そういうことをふ  
まえて。名前を書いて、少し時間とりま  
す。始めてください。

何書いていいかわかんない子いる？多

数拳手)

じゃあもう一度説明するけど。今あんた達が出してくれたのが一枚の絵なわけだ。目に見えていることなわけです。目に見えていたり聞こえたりする。それとは反対の話をこれに続けて書いてほしい。まだわかんない人。(多数拳手するが説明をやる。)

小林　もう始まつてるから、書き始めてる人いるから。

葛西　ためしだと思つてやってみて。

(書けないでいる子が多数いる。会員は子ども達にアドバイスをする。)

亀山　みんな「くすの木」とか「夜」とか言葉は出てきてるみたいだから、それをつなげてみな。短くてもいいんだよ。

葛西　ちよつとみんな、書いてる人はそのまま続けてくれていいんだけど、プリントのいちばんお終いの所「くすの木はあの夜のことを思い出したのです。」何で思い出したの？あの夜のことを思い出したことにならきつかけ。何をきつかけにして思い出したの？何をきつかけにしてあの夜のことを思い出したんですか？つてこと何だけど。

輝　母さんの歌声

葛西　母さんの歌声であの夜のことを思い出した。じゃあなんだい。あの夜、どういふことになりますか？

輝君もうちよつとだ。あの夜も何なの？歌が聞こえた。

葛西　そうだよ。あの夜も歌があった。どんな歌だろう。

今くすの木が見ている親子は？はい大樹君。

幸せそうな親子。

幸せそうな親子。あの夜の親子は？

中川　そういうふうにかけて。全体を考えて、簡単にして。

亀山　みんなが考えるのは、くすの木が思い出したあの夜のことなんだけれども、あの夜は今日の夜とは違う夜だったわけだ。それを考えて。

中川　じゃあ、どんな違う夜だったのか。

亀山　ちよつと、やめ！やめやめ！わかつてる人とわかんない人がいるみたいでごめんね。

これが事実だから、「じゃあくすの木と反対の木は何だ。」なんて言ってもそんなのはないよ。それはそのままのものもあるんだけど、みんなの絵の中で、今うかんでるのは反対の状況って言うのかな、その「あの夜」を想像するんだよ。

中川　輝君が言ってくれたよね。あの夜も歌があったんだって。そこから進めていつてくてもいいです。

葛西　閃くでしょ。その閃いたところを書いて。

(間・二分間)

あのね、反対つてあるからみんな反対しようと思つたら、これはただのおふざけみたいな事になつちゃうよね。あると

ころだけ反対にしてやるとそこからお話がすべりだすはずです。あるところだけひっくり返してやる、反対に考えてやる。それだけでもうお話はすべりだす。みんな反対つて考えない方がいい。

(七分間くらい子ども達に与える。)

亀山　はい、あと二分くらいになりました。ひとまず区切りをつけてみてください。さあ、ここでお終い。ずいぶんお話できてますよ。

大樹　はいじゃあね、途中でもいいですので鉛筆を置いてください。発表してもらいたいと思うけれども、もしできていなかったら、そこから先は口で言ってください。いいですか？別に書くことが大事なわけじゃないから。

最初、大樹君。

葛西　まだくすの木が小さかったころ、この夜とは全く正反対の不幸な親子が泣きながら母親と坊やが歌っていた。そして今にもひもが切れそうな下駄を履いてカタカタと歌いながら、まだ小さなくすのきを眺めながら去っていった。そしてまだ小さかつたくすのきの心をジーンとさせ

葛西　まだくすの木が小さかったころこの夜とは全く反対の不幸な親子が泣きながら、お母さんと坊やが歌っていた。鼻緒が切れそうな下駄を履いてカタカタと、小さなくすの木を眺めながら去っていった。そのころまだ小さかつたくすの木は、

千恵

じーんとその親子を見て来ちゃった。その日は星ひとつ見えない真っ暗な夜でした。黒い服を着た親子がくすのきのそばを通っていきました。母親は歌を歌っていました。とてもきれいな歌声でした。でもどことなくさみしい感じがしました。母親と手をつないでいたのは、小さな男の子でした。男の子はもう疲れたというようなぐったりとし、母親と同じくさみしい顔をしていました。

綾

ある夜のことでした。その道には今日植えられたばかりの小さなくすのきがありました。そのくすのきが一人で初めて迎える夜、くすのきの所に服もぼろぼろでやせかけている母親と子どもが歩いてきました。母親は疲れたような声で歌を小さな声でとぎれとぎれに歌いながら歩いていました。子どもは母親の手をしっかりと握りしめていました。くすの木はその親子が見えなくなるまでじっと見つめていました。小さなくすの木が思ったのは……

徹

もう一人くらい。徹君。(小林さんの指名あり) 小さなくすのきを通り過ぎていったのは不幸な親子でした。その親子は父親を亡くし、金もなく町中を歩き回っていました。

裕一朗

まだくすのきが子どもの小さな時のことでした。その夜も細い月が出ていました。そのころは戦争真っ最中で警報が鳴り響き、空を見れば爆撃機がトンボが飛ぶようにたくさん飛んでいました。その

葛西

時、小さいくすの木の隣を体中に包帯を巻いた親子が通りました。母親は蚊の鳴くような声で子どもに歌を聴かせていました。その時のことをくすの木は一つたりとも忘れませんでした。

亀山

書いてないところもずいぶん言ってくれたんだね。敵の飛行機がトンボのように飛んでたなんていいね。(笑) これはちゃんと録音してくれてるから心配しないで。これでひとまず、四人だね。さて、これから出発したんだよね。「事実と反対のことを仮定し想像する」今のお話、黄色の枠の中でみんな確かめたこのことと、ぴしっとこのことが押さえられていたでしょうか、どうでしょうか。例えば親子。これはどお。今、不幸な親子が次から次ぎと出てきたよね。瀕死の蚊の鳴くような声で事は傷ついているってことなわけ?! 包帯だらけの人がたくさん、まだ幼いくすの木のそばを歩いてたつていうようなことを今裕一朗君が言ってくれましたけれども。幸せな親子とはまさに「反対のことを仮定し想像した」話だったと思います。それから母さんの歌声が父さんの歌声になつてた、そういう例もあったね。というところで今の四人の人たちのものは、全部これができてたつてことといいと思います。書いてない人が結構いたけれども、こういうことを書けばいいんだなって事が

葛西

わかつてきましたか。何だそんなことかと思うでしょ。そんなことなら頭の中にあつたのになつて。どう?

中川

それではこのお話の、みんなが読んだこのお話の作者は何をやったのか。とても上手に書けたね。何を書いたのかなつてわかるよね。いちばん最後の所の文章「あの夜のことを思い出したのです。」つまりみんなこれはくすの木のお話をみんなが書いてくれたの。思い出したお話を書いてくれたの。しかも「事実と反対のこと」をちゃんと想像して。今度どんなふうになっているか見るからね。みんなのと比べてみてください。

亀山

作者はこんなふうになつてたんですね。(夜のくすの木)②を配布)

小林

じゃあ読みます。このお話を作つた人が考えた、くすの木が思い出したあの夜のお話ね。くすの木が思い出したあの夜の思い出。(夜のくすの木)②を朗読する)

葛西

裕一朗君、びっくりしちゃつたでしょう。細かいところは違うけど全体としては、裕一朗君が考えたこととほとんど同じだったね。

今の事について「何だそんなことか」って思えたと思うんですけども。今のがまあウオーミングアップだね。頭の中が「何だそうか。そう考えてきゃあいいのわ。」つてことがわかつたと思いますので、さつき同じようにまた考えてみたい



と思います。  
今配ったお話の②の中でまた「事実と反対のことを仮定し想像」するんだけど、その事実はどんなことなのかまた出した。出して下さい。指摘して下さい。  
②のお話の中の事実。  
亀山 さつきと同じようにやるんだよ。  
葛西 また引っぱり出したください。  
雄太 戦争真つ最中で、場所は広島。  
葛西 戦争真つ最中で、広島街である。つまり何？  
？ 原爆が落ちた。  
葛西 ああ、原爆が落ちた。  
徹 みんなやけどをしている。  
葛西 ああ、やけどをしている。けがをしている。  
裕一朗 雄太君と徹君につけたしなんだけど。広島街はずれでみんなやけどをしてくすの木に寄りかかっている。  
葛西 疲れたり傷ついたりした人たちが、くすの木に寄りかかっている。くすの木のもとで体を休めてるんだね。  
雄治 裕一朗君のに似ているんだけど。くすの木太い幹に寄りかかっている。  
葛西 眠ってる人、休んでる人がいるんだね。いつ？  
裕一朗 原爆の落ちた日の夜。  
葛西 夜だよ。あの夜のことを思い出したのです。」だから夜だよ。そうするとさつきも確認・確かめたことだけど、幸せな親子を見た夜だったんだけど、思い出

したのは戦争の真つ最中原爆に傷ついた人たちが逃げてきて、くすの木の下で体を休めている。もう一つ何か大事なことを落としていませんか。大樹君、君はもう気がついていないんじゃないのかな。  
大事なことがないんだよ。  
雄治 その夜もくすの木は足下で小さな歌声を聞いた。  
葛西 その夜もやっぱり歌声があつたわけです。それは事実として押さえておきたいことだね。  
さつき それではみんなの机の上に配られます。さつきのは練習、今度は本番です。  
亀山 みんな今出したのとは反対のことを、これに続けて書けばいいんだよ。  
葛西 戦争の真つ最中、原爆の落ちた広島街の夜、はいちよつとここを見て。さつきここに書いたのを消すのがもつたないので、紙の上に書くよ。怪我ややけどした人がくすの木の足下で体を休めている。くすの木の足下でやっぱりくすの木は子守歌を聞いた。「事実と反対のことを仮定して想像」してみてください。  
亀山 この「くすの木は足下で小さな歌声を聞いたのです。やさしい子守歌です。」っていうのに続けて書くんだよ。  
葛西 今度はあの夜のことでない。  
中川 やっぱりくすの木のお話なんだね。くすの木がお話ししてるんだよ。  
葛西 お話ここで終わらないわけ。「くすの木は足下で小さな歌声を聞いたのです。子

守歌です。」この後にお話を続けたいわけ。(十二分子どもに時間を与える)  
葛西 じゃあちよつと時間に限りがあるから、もう少し。  
小林 途中はしゃべってもらえば。  
葛西 まだ書けていないところは話ししてください。テープレコーダーやこのカメラがみんな撮ってくれるから。はい、じゃあだれから行こうかな。加代さん。  
加代 しかし、そのやさしい子守歌は、くすのきの下で眠っている人たちの苦しさを和らげた。そして、広島街が焼けていったときも、逃げてくる間ずつと子守歌は……  
葛西 ここもで。  
大樹 歌声が傷ついた人たちの苦しみを和らげた。  
葛西 次は、じゃあやっぱり大樹君。大きな声でね。  
大樹 ふと見ると全身の三分の二はやけどしている母親とけがひとつない小さな坊やでした。この母親の歌声はかすれてときれとぎれだったけど、その歌声はくすの木の心にこもってきた。自分が全身火傷しているのにも関わらず、小さな坊やのために一生懸命歌っていた。そしてこのくすの木はなんて幸せな親子なんだと思つた。  
葛西 今大樹君がお話の最後をなんて言つて終わりにした。「幸せな親子」。なんで幸せな親子なんだろう。  
大樹 一生懸命生きてきたから。全身やけど

葛西 しているのにもかかわらず、歌っていたから。

葛西 全身の三分の二もやけどして、もう歌を歌うのもやっとなんだよね。やっとお母さんが子どものために歌ってる。

大樹 葛西 さあ、それのどこがこれになるんでしょう。大樹君自分の作ったお話のどこをどうしたんだ。「事実と反対のことを仮定し想像する」

千恵 葛西 どう見ても不幸な親子だけど、幸せな…。どう見ても不幸せなひどい親子、死にそうなお母さん。子どもの方はそうでもないんでしょけど、母親の方は死にそうである。死にそうなお母さんに歌を歌ってもらうことによって、その子はそこで少しづつ言ったらいいのかな。瀕死のお母さんが一生懸命、歌を歌ってるところに幸せを大樹君は感じ取ったんだね。他に。千恵さん。子守歌を歌っていたのは、左手にやけどをした女の人でした。女の方はやけどをしていない右手で小さな男の子をしつかりと抱えていました。

綾 葛西 けがをしていない方の手でしつかりと抱えていた。綾さんもできています。

綾 子守歌を歌っていたのは、まだ小さな坊やを連れてくる母親でした。坊やを連れてやっとなんかまで逃げてきたのです。街は焼けてひどいことになっているのに、その母親はこのくすの木の下でちよつとだけ幸せそうにニコニコと笑っていました。坊やは母親の笑顔を見て安心したよ

葛西 うに寝てしまいました。

綾 葛西 傷ついてもつつかれてるんだけど、そこで眠ることができたのはなぜなの？

綾 母親の笑顔 母親の笑顔。千恵さんのお話では、まだけがをしてない方の手で抱きかかえてくれている。やっぱりこれはお母さんの何これ？二人とも考えてくれたのは、とってもひどい状況なんだけど、二人が考えたこととは何？両方とも同じ事を考えたんだけど。何でしょう。一言で言うとお母さんのなんて言えればいいかな。こっちでつかささんが言いましたけれど、お母さんの愛だ。これ全体、たかさんの人が傷ついている。あるいは死んだ人がいる。そこでそういう事実と反対のことを考えていったら、大樹君もそうだし、千恵さんもそうだし、綾さんもそうだ、三人ともお母さんの愛なんだっていうところへ気持ちみんなの考えがそっちへ向かい始めた。さつきも言ってもらったんだけど、徹君お願いします。

徹 葛西 その母はけがをしてもくすの木の下で一日中坊やに歌を歌っていました。それは戦争の悲しさをうち消すようなきれいな声でした。苦しんでも幸せそうな顔をしていました。

葛西 歌声がその苦しみを和らげる。その母は、けがをしてもくすの木の下で一日中坊やに歌を歌っていました。それは戦争の悲しさをうち消すようなきれいな声でした。

葛西 苦しんでも幸せそうな顔をしていました。苦しんでも幸せそうな顔。ちよつと先生読んでいてぞつとしてくるような感じに今なつたんですけれども。このとっても苦しい状況を歌声が、幸せさえ歌声で感じてしまう。そういう想像が君たちの中に今広がり始めてるってことなんだね。では、作者は何を考えたのか。お終いに読んでもらおうと思います。

小 林 葛西 「夜のくすの木」③を配布する。せつかく書いてもらったのに、発表できなかつた人がずいぶんいるんだけど、後で読ましてもらいます。

葛西 はい読みます。もう全身やけどだらけでね、ひどい状態なのに、このクラスの人たちが考えたみたいにして、苦しさの中で母の愛はね、苦しさの中でも何か美しさがあるかどうかこの作者には。まあそういう点、聞いてみてください。みんなの方が勝ってるかもしれないから。

葛西 「夜のくすの木」③を朗読する。もう時間が来ちゃってるんですけども、最後に作者のお話を聞いてどう思いますか。読み終わった感じを聞かせてほしい。

裕一朗 葛西 ぼくたちが考えたのは、なんか他の人が母ちゃんをやるってのは全然違うんだけど、やっぱり最後はぼくたちと違うパターンで悲しい感じで終わっちゃった。悲しいパターンて？

裕一朗 死んじゃってる。

葛西

確かに死んじゃってるんだけど。裕一朗君とみんな同じように考える？ 確かに君たちは「死んだ」ってお話を作った人はこの中にはいなかったんだけど。でも、今裕一朗君が言ったように他の人も感じてる？ 徹君はどうですか。

徹

死んじゃったのは悲しいけど、なんか（不明）幸せそうな感じ。

葛西

裕一朗君もちょっとうなづいてるね。確かに死んじゃったんだけど、子守歌がやっぱり女学生が……。女学生ってみんなわかるよね。今で言えば、高等学校くらいかな。その女学生が歌ってくれた歌があるんで、何？ 少しって言えばいいのかな、ただただ死んでしまったところに何があるというんだろう。君たちは幸せを少し感じてるのかな。他に感じてることがあったら聞かせてほしい。

雄治

裕一朗君達とは違うんだけど、ぼくはくすの木が思ったことなんだけど。この中に「いい歌だ歌っておやりずうっと、ずうっと、声の続く限り歌っておやり。小さな優しいお母さん！」って書いてあるところで、くすの木は歌ってやるのが坊やにはいちばんのうれしいことだ思っていたと思う。それで、くすの木はうれしいことが、坊やには幸せだと思った。（はっきりせず）

葛西

坊やが死んで、もちろん本当のお母さんじゃない女学生も死んでしまうんだけど、そこに優しい歌声がある。もうそ

れを歌っておやりとしかくすの木の立場に立つと、それしかくすの木にはできない。そこがいちばん君にはほくたちの考えたこととは違うかなって思ってたんだ。

作者と、このお話を作った人と君たちの考えたこととはね、同じだったなあとと思う。とってもいいお話をたくさん聞かせてもらったっていうふうに思います。

亀山

亀山先生からお話があります。

今日頑張ったと思うけど、いつものみんなだつたらもうちょっと頑張れたなあと思います。かたいね。それで、物語のつ毒気にあてられちゃったみたいなのころがあったような気がします。でもみんなは死んじゃう人は不幸だと思う？ 「不幸だよ。」の声あり）じゃあ、死んじゃうと終わり？（「終わり！」の声あり）そうか……。今の人生は終わり。ちょっと二学期にそういうことを考えたいと思います。

中川

みんなそこで「けど」って付けてくれたんだよね。死んだんだから、歌を聴いて死んだんだからっていうふうには、まだ何か余韻がね、みんなの心の中に先生はあるように思います。入り口ですからまた九月に頑張ってください。

亀山

まあ、ご苦労様でした。

葛西

もう始まってから一時間半。一〇〇分くらいやっちゃったんじゃないかな。大変な授業でした。

武村

みんなね、こういうふうに思ったりするよね。こういうのをイメージって言う

んだな。君たちはイメージって言うとか絵というものと思うけれども、つまりイメージって言うのは動くものなんだ。

スポーツの選手がね、イメージトレーニングしてするでしょ。自分が速くなりたい強くなりたい。イメージって言うのは動き、それを思い描きながらトレーニングすると、そうすると実際に強くなる。イメージって言うのはとにかく動いているもの。その動いていくものが君たちを動かしているんだよ。君たちはそう思えないでしょ。ところが、本当にそうなんだ。

今日自分の思っているイメージの引き出しをばつと開けて「そうだ！」って言った子どももいたし、半分くらいしか開けられなかった子もいたし、中には引き出しが全部開かなかつたかもしれない。でも、他の人のをじつと聞きながら「あの子はああいう引き出しを持つてる」「ああいうすばらしい引き出しを持つてるんだ」「だからあの子は、ああいうふうに思ったり考えたりするんだ。」そういうふう思うでしょ。「あの子らしいな。」って思うの。

それが右脳。そういうふうにしてお互いのことを理解しながら、生活しているわけなんだ。イメージって言うのは本来みんなにすばらしいものなんだ。

今日発言してくれた人は（不明）、でもお

そらく君たちもまだ自分で気がついてない箱・引き出し・はたまた……。それをね、

母さんの歌（ワークシートより）

<p>幸福から不幸を 想像する</p>	<p>不幸から幸福を 想像する</p>
<p>泰斗（なし）</p>	<p>千恵 その日は星ひとつ 見えない真つ暗な夜 でした。黒い服を着 た親子がくすのきの そばを通っていきま した。母親は歌を 歌っていました。と てもきれいな歌声で した。でもどことな くさみしい感じがし ました。母親と手を つないでいたのは、 小さな男の子でした。 男の子はもう疲れた というようにぐった りとしていました。</p>

<p>裕一朗 （途中）</p>	<p>まだくすのきが子 どもの小さな時のこ とでした。その夜も 細い月が出ていまし た。そのころは戦争 で警報が鳴り響き、 空を見れば爆撃機が 飛んでいました。（途 中）</p>
<p>徹 小さなくすのきを 通り過ぎていったの は不幸な親子でした。 その親子は父親を亡 くし、金もなく町中 を歩き回っていまし た。</p>	<p>綾 ある日の夜のこと でした。その道には 今日植えられたばか りの小さなくすのき がありました。その くすのきが一人で初 めて迎える夜、くす のきの所に服もぼろ と</p>

<p>葛西 亀山</p>	<p>これから引っぱり出しながら、どうやっ たらそのイメージの引き出しを引っぱり 出していけるか。そうするとね、ここに書 いてある「心豊かなくましい」「心豊か にするのはね、イメージなんだよ。体も精 神のたくましくするのは、もとはといえ ば持っているイメージなんだよ。今日は ね、そのイメージのほんの少ししか勉強 しなかったの。残念だけど。でも、二期 になってから亀山先生と一緒にね、そう いうことでまたいろいろ勉強してね「こ ういうこともあるんだ、こういうことも できるんだ。」「こうすればもともとと 自分の豊かな暮らしができるんだ。」そ ういう勉強をしてください。 今日は君たち一時間半も勉強しました。 こんなに勉強したって言うのは君たちも ないだろうけど、先生達もない。君たちが こんなに一生懸命やってくれると言っ はすばらしいと思う。これからも自信を 持つてやってください。今日は、ありが うございました。（ありがとうございました。 の返事） この二枚だけは集めますから。お話の 方は持つてかえってください。 集めて後でください。はい終わり。 気をつけ。終わりました。</p>
------------------	--

（授業時間・一時間四十五分）

<p>孝一 「あの夜はやさしいお父さんが赤ちゃんに子守歌を歌ってあげ</p>	<p>新 くすのきは小さかった。あの夜とは違い幸せな親子が不幸になつてしまつた。(途中)</p>	<p>大樹 まだくすのきが小さかったころ、この夜と全く正反對の不幸な親子が泣きながら母親と坊やが歌っていた。そして今にもひもが切れそうな下駄を履いてカタカタといながら、まだ小さなくすのきを眺めながら去つていった。そしてまだ小さかつたくすのきの心をジーンとさせた。</p>	<p>母親はこのくすのきの下でちよつとだけ幸せそうにニコニコと笑つていました。坊やは母親の笑顔を見て安心した様子で寝てしまいました。</p>	<p>ふと見ると全身の三分の二はやけどしている母親とけがひとつない小さな坊やでした。この母親の歌声はかすれてときれときれだつたけど、その歌声はくすのきの心にももつてきた。自分が全身火傷しているのにも関わらず、小さな坊やのために一生懸命歌つていた。そしてこのくすのきはなんて幸せな親子なんだと思つた。</p>	<p>それから2年たつて広島街は何もなかつたように生き</p>	
<p>雄也</p>	<p>友也 (なし)</p>	<p>和郎 幸せではない親子が…(途中)</p>	<p>つばさ くすのきが小さかつたころに、真つ暗な夜坊やお母さんが…(途中)</p>	<p>一美 (なし)</p>	<p>未知弥 不幸な親子(途中)</p>	<p>返つて子守歌を歌つていた。親子はけがも治つて今では幸せに暮らしている。くすのきは、「幸せになつてよかつた、よかつた。」と小声で言つたのです。</p>
<p>輝</p>	<p>明治 (なし)</p>	<p>みやこ その日は雨がぼつぼつ降る夜でした。くすのきは風呂へ向かう親子を見つめかけた。坊やは長靴を履いてかっぱを着て水たまりをふんで遊んでいます。父母は傘を差し並んで(途中)</p>	<p>康二 (なし)</p>	<p>美和 (なし)</p>	<p>春代 (なし)</p>	<p>その後、晴天が続き攻撃もあまりされませんでした。星がきらきら光る夜でした。あの親子も(途中)</p>

佐 お り	良 知	栄 登	広 太	勇	佑 里 枝
(なし)	(なし)	(なし)	(なし)	くすのきがまだ小 さいころ、夜貧乏そ うな親子が通りまし た。母さんの細々と つらそうな歌声が真 上で聞こえてきまし た。	くすのきがまだ細 く小さかったころの ある夜。古ぎたない 服を着て(途中)
(なし)	(なし)	(なし)	(なし)	この夜の幸せな親 子の歌声と同じよう な声でした。(途中)	その子守歌は、幸 せな親子の子守歌と はちがつて、少し悲 しげな声でくすのき も心細くなつてしま いました。
(なし)	(なし)	(なし)	(なし)		みしさを訴えている 声でした。

雄 治	悠 起	祥 夫	加 代
その日も細い月の 夜だった。風呂へ向 かうお母さんの悲し そうな声がくすのき の足下から聞こえて きたのです。「母さん	あの夜は歌声が聞 こえていた。でも今 日の親子とはちがつ て、母さんは坊やに とてもひどくしてい た。はつきり言って 幸せな親子とは言え なかった。とても ひどい親子でした。	あの夜の歌声とは ちがうひどすぎる歌 声が響き、坊やはと てもひどい顔をして いた。	その日は母さんの とてもこわい歌声が 聞こえてきた。もし て、くすのきの下を 親子で歩いていった。 その親子はとても不 幸であつた。(途中)
その後、親子はくす のきの下でぐっすり と眠り、戦争でけがし た体を癒しました。ど んな深い傷でも、くす のきはけがが治るよ	しかし、そのやさし い子守歌でみんな元 気になってきました。 やがて戦争が終わり ました。みんなぐっす り寝てしまいました。	しかし、そのやさし い子守歌は聞き違い で、よく聞くとだんだ んごつい声になり、歌 のせいで、木は枯れて 中がすかすかになり ました。そして木が砕 けて散りました。	しかし、そのやさし い子守歌は、くすのき の下で眠っている人 たちの苦しさを和ら げた。広島街が焼け ていったときも、逃げ てくる間ずっと子守 歌は(途中)

春 美	が悲しそうに歌って いる。」その親子は、 このくすのきの前を 三人で歩いていると きに、車にひかれて …(途中)	うに折っていました。 そして親子は、自分も すぐけがをしてい るのに、他の人のけが を和らげるようにし て(自分など…)とい うように歌を歌って いました。
その夜は、くすの きの下を母さんのこ わそうな歌声を聞き ながら、不幸そうな 親子が通っていきま した。	そして、何日もした ある日のことでした。 (途中)	

教師は実名を漢字で表記した。児童は仮名をひらがなで表記した。

